

コロナ禍における分散型公園利用を促進するデジタルスタンプラリーの実践

The practice of Digital Stamp Rally for distributed park uses under the Coronavirus crisis

嶽山 洋志* 尾谷 悠介* 守 宏美** 北村 智顕**

Hiroshi TAKEYAMA* Yusuke OTANI* Hiromi MORI** Tomoaki KITAMURA**

Abstract: Due to the outbreak of infectious disease, from 2020 to 2022, in the city parks, it is difficult to hold face-to-face events and keep the level of park services. In the context of these circumstances, we held a Digital Stamp Rally in the northern Awaji area and northern Harima area in Hyogo, with the aim of proposing a new method of holding the park event that can be carried out even in this pandemic. As a result, a total of 144 people took part in this event in 17 days (in the northern Awaji area), a total of 119 people took part in this event in 23 days (in the northern Harima area) with keeping the social distancing between the participants and taking measures against infectious disease. In addition, by placing stamps in multiple spots in one park, the participants come to use the park more widely, and we can prompt distributed park use. Digital Stamp Rally is a method of holding events which is suitable for the current social situation, and it can be said that it has great potential as a post-pandemic program.

Keywords: Digital Stamp Rally, distributed park use, the coronavirus pandemic

キーワード: デジタルスタンプラリー, 分散型公園利用, コロナ禍

1. はじめに

コロナ禍において、都市公園は子どもたちの遊び場や多くの人の健康を支える都市の貴重な屋外空間として機能した。その一方で、利用者が密集した公園も確認され、結果、一部の公園施設を閉鎖せざるを得ない状況も発生した。そのような状況を回避するために、いかに利用者を分散させるかが公園運営においても重要な論点となり、具体的に海外の公園管理では、混雑しているか否かを google で調べてから公園に行くよう促したり、街中のパブリックアートを紹介して公園から別のオープンスペースへ誘導したりするなどの取り組みが行われていた¹⁾。

兵庫県でもこのような「分散型公園利用」の議論は行われ、園内の利用頻度の低い場所や、周辺の都市公園や観光施設の魅力を連携・発信し、利用者を空間的・時間的にすみ分けさせる方策について議論があった。具体的に公園内では、例えば遊具エリアや芝生広場などは利用者が多いが、他のエリアの中には利用者が少数のところも存在する。その魅力を高めて利用者を分散させ、密集密接を避けることが出来ないかといった議論や、公園外では、複数の都市公園や観光施設が連携し、施設間は自転車レーンなどで繋げていければ、健康面あるいは地域活性化の面で有効ではないかといった議論が行われていた¹⁻²⁾。

本報告は、そのような分散型公園利用を促進するプロジェクトとして、兵庫県の北淡路地域と北播磨地域で実施したデジタルスタンプラリーの取り組みを紹介する。本プロジェクトは集団で滞留する行動ではなく「個人や特定グループで実施する動的なレクリエーション」であること、またスマートフォンを使って行うことから、接触感染のリスクがないことも特徴として挙げられ、コロナ禍にあっても実施できるプロジェクトとして実施した。

2. デジタルスタンプラリーの概要

(1) デジタルスタンプラリーの画面構成

図-1 にデジタルスタンプラリーの画面構成を示す。

デジタルスタンプラリーの流れは下記の通りである。まず、1) 専用サイトからスタート画面に入り、アンケートを入力、利用規約に同意し「はじめる」をタップする。2) 次に「マップを見る」をタップすると、スタンプのポイントが表示されるので、その地点に向かう。3) 対象スポットに到着したら、設置された QR コードの前に行く。4) マップから目的の対象スポットをタップし「スタンプを押す」をタップする。5) カメラモードに切り替わるので、QR コードを読み取る。6) 最後にスタンプが獲得されたことを示す画面が表示され、さらに一定数のスタンプを集めると、景品に応募することが出来る画面が表示されることとした。

なお本システムの制作には、ボールドライト株式会社の Platinarily を使用した。

(2) 実践地の概要

表-1 にデジタルスタンプラリー実施施設を示す。

1 つ目は兵庫県の北淡路地域で“淡路島の自然と景観を満喫するスタンプラリー”をテーマに、2020年12月11日～27日の期間に実施した。本地域は県立淡路島公園や花さじきなどの花みどり関連施設が集積していることが特徴として挙げられる。スタンプのポイントはそれら7施設に、地域の商店の活性化につなげるべく商業施設18施設を加えた25施設(QRコード数は38地点)とした。なお、県立淡路島公園や国営明石海峡公園においては、園内でも分散して楽しんでもらうべく、QRコードを公園内に分散的に設置した。なお、本事業の特設サイトは下記のとおりである。
<https://awaji-digitalstampally.jimdofree.com/>

2 つ目は兵庫県の北播磨地域で“北播磨の自然と景観を満喫するスタンプラリー”をテーマに、2021年11月13日～12月5日の期間に実施した。対象地は県立播磨中央公園や多可町余暇村公園など、兵庫県の北播磨地域に立地する都市公園8施設とし、北播磨広域観光協議会の協力を得ながら、サイクルツーリストの参

*淡路景観園芸学校/兵庫県立大学大学院 *Awaji Landscape Planning & Horticulture/ Graduate School of Landscape Design & Management, University of Hyogo

**兵庫県公園緑地課 **Parks and Greenery Division, Hyogo Prefectural Government



図-1-1 スタート画面

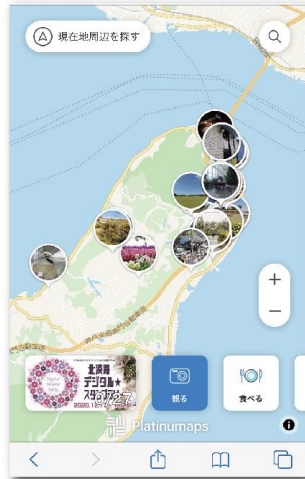


図-1-2 マップ画面



図-1-3 スポットの様子



図-1-4 スポット情報画面



図-1-5 カメラモード



図-1-6 スタンプ獲得画面

図-1 北淡路デジタルスタンプラリーの画面構成

表-1 デジタルスタンプラリー実施施設

<p>■北淡路デジタルスタンプラリー(32施設38地点)</p> <p>国営明石海峡公園(4地点)、淡路島公園(3地点)、花さじき、淡路景観園芸学校(2地点)、夢舞台、奇跡の星の植物館、淡路島冒険の森、野島断層保存館、岩屋港(淡路ジェノバライン乗り場)、その他の観光商業施設23施設</p> <p>■北播磨サイクルスタンプラリー(8施設8地点)</p> <p>播磨中央公園、ひまわりの丘公園、日時計の丘公園、余暇村公園、なかやちよの森公園、日本へそ公園、平池公園、ラベンダーパーク多可</p>
--

加を中心に事業を実施した。本事業の特設サイトは下記のとおりである。 <https://kitaharima-cyclestampally.jimdofree.com/>

3. プロジェクトの成果

(1) 北淡路デジタルスタンプラリー

1) 開催実績

2020年12月11日から27日までの17日間にわたって実施した結果、参加者数は累計144人で、そのうち一定数のスポットを巡って、景品の抽選に応募した人数は39人(当選者数23人)であった。この参加者数と、同期間に開催されていたスタンプラリー「あわじ花へんろ」の参加者数を、花緑関連施設7施設の1ヶ所あたり平均参加者数で比較すると、前者が15人/日であるのに対し、後者は2.14人/日と、およそ7倍の増加が確認できた。これは、地域や公園に広く分散して遊ぶといった、コロナ禍でも安心して実施できるイベントであるというコンセプトに、多くの参加者が共感した結果であると考えられる。

2) 参加者の特徴

スタンプラリーに参加する際、参加者に居住地、年代、性別について回答を求めた。その結果を以下に示す。

まず、図-2より参加者の居住地について、兵庫県内に居住している人の割合が62.5%と最も高く、次いで大阪府からの参加者が15.3%と、この2府県で約8割を占めた。淡路島は観光スポットも多く、平時であれば他府県からの観光客も多いが、コロナ禍で県をまたぐ移動がしづらいことから、このような結果になったと思われる。

次に、図-3より参加者の年代と性別をみると、30-40代の女性の割合が高くなっており、子育て世代であることから、家族で参加されていたのではないかと推察される。また、60-70代以上の高齢層も一定数参加しており、スマートフォンなどのデジタルツールを用いたスタンプラリーでも、高齢者の参加が見込めることが分かった。

3) 公園の分散利用

今回、国営明石海峡公園と淡路島公園内に複数箇所、分散的にスタンプを設置したことにより、参加者が公園を広く利用してい

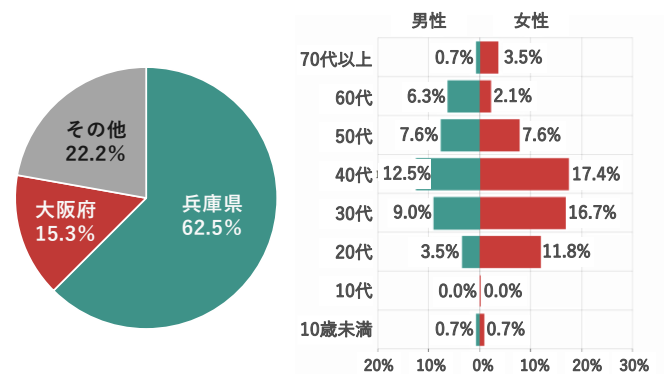


図-2 参加者の居住地

図-3 参加者の年代と性別

表-2 30代女性が回ったスタンプラリーの流れ

参加日	時間	QRコードを読み取った地点
2020/12/13	13:44	淡路島国営明石海峡公園：移ろいの庭
2020/12/13	14:05	淡路島国営明石海峡公園：月のテラス
2020/12/13	14:19	奇跡の星の植物館
2020/12/13	14:29	淡路夢舞台公苑／百段苑
2020/12/13	14:45	淡路島国営明石海峡公園：夢っこランド
2021/12/13	14:57	淡路島国営明石海峡公園：タコのお出迎え花壇



図-4-1 スタート画面



図-4-2 マップ画面



図-4-3 スポット情報画面



図-4-4 スタンプ獲得画面

図-4 北播磨サイクルスタンプラリーの画面構成

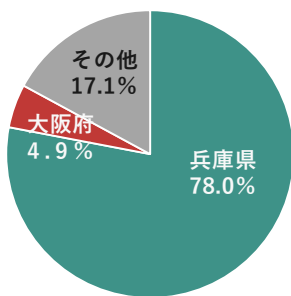


図-5 参加者の居住地

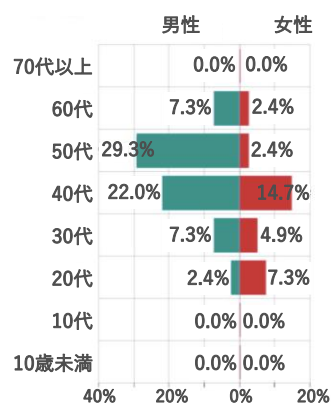


図-6 参加者の年代と性別

る傾向がみられた。表-2は、ある30代女性が一日で回ったスポットを時系列順に表したものである。この女性は最初に明石海峡公園にある4つのスポットのうち2つを回った後、奇跡の星の植物館や淡路夢舞台に行き、もう一度明石海峡公園に戻り、残りの2つのスポットを回るというルートをとっていた。このように公園を広く回る行動は、国営明石海峡公園だけで20名確認できた。

4) 公園管理者の評価

2020年12月18日に開催された、花緑関連施設7施設による会議での参加者の発言記録と、2021年1月15日の国営明石海峡公園および淡路島公園の管理者へのヒアリングから、公園管理者

が感じた本プロジェクトの印象を把握した。結果、「新型コロナウイルスが確認されて以降、いろんなイベントが中止になっているなか、デジタルスタンプラリーを実施していただき大変助かっている」「デジタルだと物を介さずにイベントを実施できるのが大変よい」「簡単に誰とも接触なくできるのはとてもいい」など、コロナ禍でも実施可能なプロジェクトとして評価を得ることが出来た。

(2) 北播磨サイクルスタンプラリー

北淡路地域と同様にスタンプラリーサイトを構築、図-4に示すような画面で実践した。なお、公園間の移動が30km/h以上であった場合は自動車等での移動と判断、対象から外すこととした。

1) 開催実績

2021年11月13日から12月5日までの23日間にわたって実施した結果、参加者数は累計119人で、そのうち一定数のスポットを巡って、景品の抽選に応募した人数は27人(当選者数18人)であった。また、8施設の1ヶ所あたり平均参加者数は4.76人/日であった。

2) 参加者の特徴

図-5より参加者の居住地について見てみると、兵庫県が78.0%と圧倒的に多かった。図-6より参加者の年代と性別をみると、男性が68.3%、女性が31.7%、また40、50代の男性で半数以上を占めるなど、中年男性の参加が多かった。

3) 参加者の印象

Instagram や YouTube での投稿記事から参加者の印象を捉えみると、「はりちゅう(播磨中央公園)以外は、今回初めて訪ねる場所。それぞれ、季節を改めてまた来たいなと思いました」など、新しい公園をめぐる動機となることがかがえた。また「1日では完結、完了せず。2日にかけてトライ」など、宿泊型の観光にも繋がる可能性も感じられた。

4. おわりに

従来から行ってきた対面型の公園サービスの多くが展開困難となったコロナ禍にあつて、分散型の公園利用を基本的に議論を行った結果、デジタルツールを用いた公園レクリエーションが有効だという結論に至った。そして今回、その一例としてデジタルスタンプラリーに取り組んだ結果、多くの参加を得ることができた。

本プロジェクトはアフターコロナにあつても実践可能な取り組みであり、日常的な公園プログラムの中にデジタルツールをもっと取り入れていくきっかけになればと思う。より発展的には、得られたデータを用いての公園運営や観光振興にもつなげていくことが出来ればと思う。

補注及び引用文献

注) Seattle Parks and Recreation の Facebook を参照した

- 尾谷悠介・嶽山洋志・山本聡・薬師寺恒治・中瀬勲(2020):都市公園における新型コロナウイルス感染症の流行が公園利用に及ぼす影響:日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集18, 1-4
- 嶽山洋志・若井幸夫・山本聡・薬師寺恒治・中瀬勲(2021):位置情報ビッグデータからみたコロナ禍における都市公園の利用実態:ランドスケープ研究84(5), 475-478